

天声人語

だつた▼財閥や国會議員などを5人の悪党になぞらえ、攻撃した。高級公務員に對しては「できることでも絶対やらず、できないことでもすんなりと、机の上には書類の束、机の下には紙幣の束」（渋谷仙太郎訳）などと書いた。詩人は逮捕された▼こちらも、鋭く重い紙つぶてが投げられた話である。森友文書の改ざんに加担させられ、死を選んだ近畿財務局の職員、赤木俊夫さんの手記が明らかになった。生の最後の場面で書いたと思われる記述は、迫真である▼改ざんの指示が財務省の佐川宣寿理財局長（当時）から来たこと。彼の部下たちが修正箇所をどんどん拡大し、現場の近畿財務局に押しつけたこと。その指示に、あっけらかんと従う者すら一部にいたこと……▼手記が示したのは、不正な行為、違法な作業が止まることなく進む巨大組織の姿である。赤木さんの妻は、国や佐川氏を相手に訴訟を起こした。手記を前にして再調査すらしようとしない財務省とは、組織を守るだけの存在なのか▼冒頭の詩には高級公務員のこんな生態も描かれ、どきりとする。「目上の者には愛玩犬、目下の者には狩猟犬」。上には従う愛玩犬の群れが思い浮かぶ。そして最終的にしつぽを振った相手、すなわち安倍首相にも、つぶては投げられている。

紙つぶてという言葉がある。紙に書かれた文字がつぶてとなり、ときに権力者たちの急所を突く。1970年、軍事政権下の韓国で、金芝河さんが発表した風刺詩「五賊」がまさにそ